語學初步

芳賀真咲選

下

ホ 2
538
2

加賀藩
門外
號 ナ37
巻 24

加賀藩
尚書

語學初歩附録

芳賀真咲　選

言語ノ性格ヲ明ラメンガ爲メ文章又ハ詠歌ノ傍ラニ其ノ性格ヲ附スベレヲ格調ベト云フ格調ベヲ爲スニハ左ノ畧體ヲ用ヰルベシ

有形體言　名
無形體言　名
假體言　代
副詞　副
四段活用　四
一段活用　一
中二段活用　中二
下二段活用　下二

加行變格活用　カ変
奈行變格活用　ナ変
形狀言クシキ活用　ク
音讀用言　立
第二階連用言　用
第四階連體言　体
形狀言第一階　用
形狀言第三階　体
助辭未來　未
助辭過去　去

佐行變格活用　サ変
良行四段一格活用　四一
形狀言シクシキ活用　シ
第一階將然言　未
第三階終止言　止
第五階已然言　已
形狀言第二階　止
助辭　ヲ
助辭現　見
助辭疑　疑

助辭禁止　示
助辭命令　令
反切　ヤ
伸音　申
段落　レ

助辭請願　願
助辭反動　ヲ
音便　更
係結　ハ

我等ノ住居スル世界ハ平ナルモノニ非ズ實ハ圓クシテ球ノ如キモノナリ故ニ世界ヲ地球ト云フ」小學讀本

（前段ヲ終ヘテ後段ヲ起ス）

（事物ヲ取出スニアルノヒ）

何事ヲ學ブニモ勉強ヲ第一トス勉強セ

四已　ザレ　ズアイモ　バ　耳去久合　學問　三因テ　ニ　耳　上達　立　スル　左交倚　ヿ　久合　能ハ　四十　ズ　耳　小學道　徳論

人ノ心ハモト善キモノナレドモ善キ教ヘヲ聞キテ是レニ從ハザレバ善キ人ト成リ難シ　小學道　徳論

武蔵ノ國ノ人盲目ニシテ專ラ皇朝ノ學ヲ好ミ博學強記ニシテ群書類從三十七十部ヲ編纂ス

塙保己一幼時病テ明ヲ失フ嘗テ源氏物語ヲ某氏ニ講ス日暮テ風燈ヲ滅ス坐人暫講ヲ輟メンコトヲ請フ保己一曰ハク何ノ故ゾ曰ク風燈ヲ滅ス當ニ之レヲ點

ズベシ保巳一笑テ曰ク目アル人誠ニ事
ニ便ナラズ幼學綱要
徳川光圀ハ頼房ノ子ナリ人ト爲リ英毅
ニシテ學ヲ好ム嘗テ舊史ノ闕文ヲ慨シ

彰考館ヲ置キ名儒ヲ招致シ奏請シテ御
府ノ秘冊ヲ出シ天下ノ逸書ヲ募リテ歷
朝ノ實録ヲ編輯ス名ヅケテ大日本史ト
曰フ神武天皇ヨリ後小松天皇ニ至ル凡

テ二百四十三卷文化中光圀ノ裔孫治紀
表ヲ上リテ之ヲ進ム勅諭之ヲ嘉ス治紀
ノ孫齊昭遂ニ鋟版シテ世ニ行フ蓋シ光
圀此ノ書ヲ撰セシヨリ校補世ヲ累ヌト

コソと係リケレと結ビシ助辭ニテ忠孝兼備ヘタル武將ノ眼中ニハ涙ヲ含ツヽ切諫ノ伜ヲ見ル

云フ幼學綱要
只末代ニ生ヲ受ケテ懸ル憂キ目ヲ見ル
重盛ガ果報ノ程コソ口惜シケレサレバ
申請ル處御羨引ナクシテ猶御院參有ル

べクバ只今重盛ガ首ヲ名サレ候へ（源平盛衰記）

かくても皇居の警固如何あるへしと叡

慮ヲ思ひ煩ハさせ給ひ藤房卿ヲ勅使と

して河内國の住人楠多門兵衛正成を召

さる正成いかねてより頼まれまいらせ

し事なれバ取敢ず笠置ゟ參る主上藤房

卿をして東夷征伐の事正成ゟたのゝ思

召るる所ありいかなる計をや運すべき

所存城申さべきよし勅定ありければ正成畏て東夷近日の大逆ただ天の譴を招き候上い衰亂の弊まのりく天誅城致さんま何の子細う候べき一旦の勝負をばう係りへキト結ヒシへき即チ天道ヲ判断シタル助辞ニテ

楠公決意ノ有ル處ヲ見ルニ足レリ

必ずも御覧ぜらるるうゝず正成一人いまゞ生てありとざまる聞し名され候いバ聖運遂に開かるべしと思し名され候へとたのもしげま答申して歸國志さり南山

ざニノ助辞ニテ唯一人百万ノ軍ニ當ル勢ヲ見ル

巡狩録

其比兒島備後三郎高徳は主上笠置山ゟ
御座の時義兵をあげ錦の御旗まで賜ひ
さりしゟ灰冴の官軍落去けるゆゑカ城

失ひ居さりしゟこのとき宗徒の一族を
相催し主上の御幸路次ゟて奪ひ奉らん
と備前播磨のさかひ舟坂ゟまちたれど
を御幸ハ播磨の今宿より山陰道ゟかゝ

らせ給へば道たがひけりなほも美作の
杉坂にてまち奉らんとまゝ杉坂までい
そぎ来りしにはや鳳駕い過させ給へな
今ハせん方なくこゝより微服潜行し君

の御座あり御宿に忍び其庭の櫻木を押
削て大文字に一句の詩を書付たり警固
の武士是をみつけたれども讀かねけれ
ば上聞に達しけるをみ給へば天莫空勾

踐時不無范蠡と有ければ主上詩の心を
察し給ひ龍顏ことゝ御快ゝれはしまし
けり（南山巡狩録）
四十年夏東夷れほくをむきて邊境さは

ゞしうりければ又日本武の皇子を使ひ
はゝ吉備の武彦大伴の武日を左右の將
軍ゝしてたひ梦へしめ給ふ十月ゝ枉道
して伊勢の神宮ゝまうでゝ大倭姫命に

はうり申給ふ彼命神劔ゟさづけくだ
さんでふれこゝをりそとをしへ給ひける
駿河ふいさるゟ賊徒野ゟ火をつけて害
し奉らん事ゟはうりけり火のいきほひ

あれこゝをりゝ怠ルヿ勿レト禁止シ給フ

まぬゝれかゝさうり筆ゟはゝせる叢雲
の劔ゝづゝらぬけゝうたはゝのゟゟゟな
だゝろふ是ゟより名ゟあゝらゝめく草薙
の劔ゝ云ふ又ゟうちをゝて火をいざし

てむうひ火をつき賊徒を焼き滅されき〻助辞ニテ盛殺ヲ見ル

き是よ里船ま乗し給ひて上總にいさり轉じて陸國まいり高見の國まいさおとぐく蝦夷を平定給ふ神皇正統紀

こそト係りけれト結ヒタル助辞ニテ嘲ケル意深シ

左相いきどほりをぬくそさまぐの讒言まうけそ終まうさふけ奉里し事こそのざましけれ善相公清行朝臣ぞ此事いまぞきぢしざ里しにうあてさとりて菅氏

ゑきの助辭ニテ封事ノ使勞ニ爲セレシ惜ムヲ見ル

ゑ災をのがれ給ふべきよし城申奏れど
ささふくく此事出来ゑき　神皇正統紀
義朝重代の兵をりしうへ保元の勲功を
きられざさく侍るしふ父のくびをきら

せをりし事大ぬるとぞなり古今をきゝ
ぢ和漢ゑ例ふし勲功ゑ申替ゐとゞみ
づうら退くことをなどゝ父を申たにくゐ
道をうるべき名行かけはそゑりれぞい

うと係りべきト結ヒタル助辭名行欠ケ果タル無道ノ人ハ其身ヲ全クスル謂レナキヲ判斷ス

すでゝ法ひゝ其の身ゝ治をくもべき　神皇正統紀

たゝそ保元平治よりこのうさみだりゞ

はしきゝ賴朝と云人も亦く泰時と云も

ゝノ助辭ニテ皇威ハ衰ヘ果テ武備ハ勝チ

のなうらましかば日本國の人民いうゞ

なをおまゝ此のいを逆ゝよく志らぬ人

も故もおく皇威のれと衰へ武備のうち

ゝ多ると思へるもいやまりおを　神皇正統紀

切タト思フハ誤ニアル然ニハアラス皇道ヲモ重ンシ武備ヲモ敬ニシタルナリト云フ程ノ意ヲ見ル

戊寅の春二月鎮守の大將軍顯家卿又親
王をきさきて申かさゑく打上る海道の
國々おとゞくきひらきぬ伊勢伊賀を經
て大倭に入り奈良の京にはん着ふまる

けんハ官軍ニ時ノ至ラヌヲ怪ミ疑フナリ

よきノ助辞ニテ討死ノ事ヲ暗ニ云ヒ来テ東國又官軍ナ

それよ里所々の合戰あまた度たゝひふ
勝負侍りしに同五月和泉の國にてのき
きゝひに時やいさらざりけん忠孝の道
おゝに極り侍りにき苔の下にまうつと

シノ意ヲ概シ合セテ我子ノ死ヲ歎ス

のミハ俚言バソカリト釈レテ五体ハトヾメヌヨヲ云フ白樂天ノ詩ニ埋骨不埋名トアリ其意ヲ拳ケテサテく心愛イ世ニマアアルコカナアト歎息ス

きぬ物とくい唯いさづらは名をのこせ

とゞめしこゝろき世まを侍るの歌 神皇正統紀

さうきやうのほりさみれいはりふたこの

かまとはるきはひまりり 仁徳天皇御製

ヒハ五畿七道固ヨリ源山ノ前辺ノ下ニデモト言外ニ含ム

あんハ過去ニテきけりせニ係レリ山ハやしけそシマイ海ハりせくシマウ世ニナリトモ也

やはハ反動ニテ二心アロカイヤナイト云フ也

れくやまのれとなのりをふきわけきちかるる

よそと記ふ志ろうぜん 後鳥羽天皇御製

やまいきけうこそあせあん世なりとときみる

ふくそろとうあるめやは 鎌倉右大臣

親ノ喪服ヲ脱ノ時ニ詠ル歌

かきりなれぬぬきすてつ蔡ゑもはてぬ

ちのいなみさかりなり　左近衛中将道信

和のるとも名ふうちけん君をまてしらきふる

きてなをもるゆやもぬ　文貞公

世のあういかはうこ聴かあ〜ゆ秋きのよ

はきらはかきるきまこ　豊臣太閤

武士のうはやのかゆ記とまちふれかよきるい

神をきるあ　菊池入道寂阿

君の代もわとせのはるをよろのゝはあり

しれい俚言ニイナアトニヲフ ニテ君カ御代ヲ賛美シタルナリ

ちきりハかきをなからしれ 東照宮

いろのゝく伊勢乃はまをきふくうせの浪を

まきりまきとよをふきちらん 北畠顯能

まき俚言テミヘルタタ

わくらゝ波をいれて尋ねはふるさと

うヤコノヤ反動ニテ見ヤウモノカ見ラレス也

こゝちの色紙みましや 徳川二代將軍

子息大江孝周ノ病ニ代ラント神ニ祈ル時ノ歌

かはらんといのるいのちにわかうてさゝと

和うれんほとをかふしを 赤染衛門

如意輪寺ノ扉ニ矢ノ根モテ彫付シ歌

うらしとかまくれなゐをあつきゆゑあきこう

ほるいる名ぞそうむる　楠正行

失セ物アリテ嫌疑ヲウケ嘗公ノ廟ニ祈リシ時ノ歌

れさひいつおきぶろさそうこしとのら

ひとのみよりしむこしを　待賢門院小大進

みやまきの花は桜ちるもみえそうしさたこい

さ野よりこしさ是ふり理　源三位頼政

大病ノ時ニ詠メル歌

いるせんゆくへきうさうをれをほえ歌こそ

きさつ是を志こ神は小式部内侍

ぬさたてみほめて仕くまるまきはすら名く

やまとまし　俚言
ズアロウモノ

しろたまきうたのきらまし　加茂真淵

いそのかたに曳れきらまを旅人のあそうを

はるのちりぬる　太田道灌

志ぬしは乃ゆすりこそ誠人をはて　わさ記ま

ひるよ風未ぬ風を乗　本居宣長

天皇の身はしらさのまてるよ　れきあるう　うせふ

きよ義と者のむはるあき　後醍醐天皇

息千古ク旅ニ出立時ニ詠メル歌

たらちねのわかれやすまのとまりとはしるらむ

あとゝめて俚言留ムルヿ勿レ

はつかいせきふるてめを 小野千古母

まるりか俚言テシマウタイナアト云フニ同シク我身ク老タルヲ歎息ス

もゝ敷のいはふらうまりあいてつゝ我

ゆふふるあうめをゝ海ふ 小野小町

人をよゝかゝるよ浦くらを和の杖をやまと

志ますをよ老てむとそれをふ 平田篤胤

敷露のれくそ乃いふはかり是めるう和

世の中ハ恐ひ為るう邪 紀貫之

いそのかみふるのうつもりは義知の

きゝ侍ふわすれ草をふるとりとゝ人ゝ

うきせうきをうれしくとゝ特ゝうまきけ久ん大

さはりきゝぬわうふゝうの郡　土御門天皇

隨意便言シダイ點云ハトイフ

物部乃臣之壯士者大王任乃隨意聞跡云

物曽　笠朝臣金村

須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流

美知能久夜麻爾金花佐久　大伴宿禰家持

文夫者名乎之立倍之後代爾聞継人毛可
多里都具我禰 山上憶良
於保吉美能美許等可之古美伊蘇爾布理 解
宇海乃波良和多流知知波々乎於伎豆 丈部造人麿

物皆者新吉唯人者舊之應宜 柿本人麿

語學初步附録終

明治十六年三月二十七日版權免許
同　年　八　月　出　版

版權所有

著述者　福井縣士族　芳賀眞咲
宮城縣下陸前國仙臺區東五番丁一番地

兼出版
發兌人　宮城縣平民　伊勢安右衛門
同縣同國仙臺區國分町十七番地